

11 MTX療法が有効であった関節拘縮を伴った斑状強皮症の女児例

(小児科, 皮膚科*, 病院病理部**)

中島周子, 篠本雅人, 河島尚志, 露木和光, 武隈孝治, 星加明德, 大久保ゆかり*, 古賀道之*, 清水 亨**

強皮症におけるMTX療法の有効性について近年海外にて報告されているが, 本邦ではほとんど報告がない。我々は関節拘縮を伴った斑状強皮症の女児にMTX療法を施行し臨床症状の改善を認めた症例を報告する。症例は11歳女児。8歳の頃から右前腕皮膚に光沢が認められ, 同側の第4, 5指の伸展が困難となった。臨床症状及び生検等から斑状強皮症と診断した。リハビリテーションと軟膏療法を施行するも症状の悪化が認められた為, MTX療法を施行した。治療後, 皮膚病変の縮小, 軟化と斜頸の改善を認めたが, 手指関節の拘縮と可動制限の改善は認めなかった。患児の皮膚の生検より線維芽細胞の樹立を行った。病変部からの細胞の増殖は患児の正常部及び健康人の細胞に比べて増殖が遅く, 尚かつ集簇傾向が見られた。患児の線維芽細胞のFas抗原の発現は健康人のそれと同程度であった。さらに線維芽細胞のステロイド, MTX, Fas抗体に対する感受性についても比較検討した。

12 慢性関節リウマチの経過中に好酸球性肺炎, BOOP所見を呈した一例

(東京医科大学内科第一講座*, 東京医科大学第二病理)

黄川田雅之, 國澤 晃, 宮本 大介, 柳沢 直志, 楠本 洋, 峯村 和成, 鳥居 泰志, 米丸 亮, 海老原善郎*, 市瀬 裕一, 外山 圭助

症例は81歳の男性。慢性関節リウマチの経過中, 1992年胸部X線中間質性陰影出現し, 経気管支肺生検(TBLB)ならびに気管支肺胞洗浄液(BALF)でEosinophilic pneumonia (EP)と診断しステロイド剤投与を開始した。その後, いったん治療を中止し経過観察していたが, 1995年1月EP再燃したためステロイド剤投与を再開しPSL7.5mgで維持していた。しかし再度胸部X線上浸潤影が出現し, TBLBで肺胞腔内への器質化性滲出物の出現やBALFでのリンパ球の上昇からBronchiolitis Obliterans Organizing Pneumonia (BOOP)と診断した。慢性関節リウマチに伴う肺病変で, EPからBOOPへと経時的に変化した点は, 何らかの免疫学的機序にもとづくもので, 両者が同一線上の疾患である可能性を示唆するものと考えられた。若干の文献的考察を加え, 報告する。